天地

ネットワーク テーブル　５０５号

天地シニアネットワーク　2020。3．13

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ　＜みことば＞			1
会員の広場			3
随　想	英会話の楽しみ（４）英語の単語を憶えて語彙数を増やす	伊那闊歩	3
論　考	中国人から見た日本人の言語表現心理（１３） ＜相手に和する五つの心＞	兪彭年	7
随　想	本居宣長について	赤羽清志	9
随　想	さらに昔から「いい人」の国だった＜１＞ 「これほど天賦の才能を持つ国民はない」	臺　一郎	１４
紹　介	「心と身体にいいものを」・日本緑茶センター記念誌より 北島勇さんと海外茶・ハーブテイー（３）		１６
講演会	「新三木会」（休講）「奈良興福寺文化講座」（休講）		１７
事務局			１８

****

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ

****

東日本大震災（２０１１年３月１１日）の時、秋葉原の旧事務所にいて、激しい揺れに窓枠に掴まりうずくまっていました。崩れそうな小さな古いビルの最上階の７階、不思議と恐怖感はありませんでした。

令和２年３月１３日、町屋の事務所にきましたが、目に見えぬ新型ウィルスに強い不安感、恐怖感を感じています。

東日本大震災時は民主党政権、「何も決められない政権」と安倍さんは皮肉っていましたが、現在は、「決めても結果がなかなか出ない」政権にみえるので心配が大きく増します。

****

世界中の株価が大暴落、トランプ大統領の出現以来自国中心主義が世界の潮流になり、連携プレーが難しいと、世界がコロナ騒ぎを悲観的にみているせいでしょうか。

世界が、再び中道、協調路線に戻るか、あるいは、自国中心の孤立主義にさらに進むか、株価が先読みしそうです。

****

火元の中国がウィルス封じ込めに成功したと報じられており、新型コロナウィルスとの戦いに一縷の希望の光が見えています。世界の生産工場となった中国が回復すれば、世界経済の立ち直りも早くなると、やや楽観的な予想をしているのですが・・・。

とは言え、日本経済はオリンピックの開催も危うくなり、経済は非常に深刻な状況を迎えそうです。政策的に手詰まり、安倍首相の指導力にすがるしかなさそうですが、神風が吹くでしょうか。

****

＜受信メール＞

いつもありがとうございます。昭和 33 年、立教から長嶋が巨人に入団。小学校の 4 年でしたが、にわかに野球に熱中しだしたのを思い出します。全くへたくそで、叔父にからかわれてばかりいて、中学でも野球部には入部、でもすぐに日時が痛くなり止めました。本当は、球拾いばかりでつまらなかったからですが・・・

それでも高校では中学の先輩に誘われて、ハンドボール部員でした。人数ぎりぎりの為、すぐレギュラーで活躍？余計なおしゃべりですみません。いろいろ思い出した次第です。

石川敏明

****

＜みことば＞

最上のわざ

この世の最上のわざは何？
楽しい心で年を取り、働きたいけども休み、しゃべりたいけども
黙り、失望しそうなときに希望し
従順に、平静に、おのれの十字架をになう。
若者が元気いっぱいで、神の道を歩むのを見ても、ねたまず、
人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、弱って
もはや人のために役立たずとも、親切で柔和であること。
老いの重荷は神の賜物、古びた心に、最後のみがきをかける。
まことのふるさとへ行くために、おのれをこの世につなぐ鎖を
すこしずつはずしていくのは、真にえらい仕事。
こうして何もできなくなれば、それを謙虚に承諾するのだ。
神は最後にいちばんよい仕事を残してくださる。それは祈りだ。
手は何もできない。けれども最後まで合掌することはできる。
愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために
すべてをなし終えたら、臨終の床に神の声をきくだろう。
「来よ、わが友よ、われなんじを見捨てじ」と

（『人生の秋に』ヘルマン・ホイヴェルス）

廣澤敏明・牧いずみ編集　「祈りと聖書の言葉」　より

****

会員の広場

****

英会話の楽しみ（４）

伊那　闊歩

4. 英語の単語を憶えて、語彙数を増やす

1.　筆者(闊歩)が通っている英会話教室では、今、テキストとしてイスラエルの歴史学者ユバル・ノア・ハラリ(ヘブライ大学教授)の著書「21 Lessons for the 21st Century」を使っている。世界的なベストセラーだから、邦訳が全国の書店に現在平積みされているところも多いのではないか。かれは、現代人が疑問に思っていること、知りたいとおもっている話題を拾い上げ、それらをグローバルな視点で分析し、かれ独特の考えをまとめて組織的に述べている。

　英会話教室では、参加者が１節ずつ読みすすめ、それぞれ感想や意見を述べあうのだ。予習をしっかりしてこなければなにも喋れない。かなりしんどいがそれなりの収穫も大きいとおもわれる。教室の常連で英語の通訳をやっている人たちは、反射的に喋りはじめるが、政治経済の話題となると専門用語もたくさん現れるので、言葉につまることも度々ある。筆者(闊歩)には、簡単な英単語もすぐに出てこなかったり受け答えにアタフタしたり、かなりきつい。まして理路整然とした英文を作って即座に喋ることなど 10 年はやいような気がしている。そもそも頭の中で英作文してから喋るのでは、おそいのだ。あたりまえだが、自然に受け答えができなければ、会話を楽しむことはできない。四苦八苦しながらも又とない良い機会を与えられたものと頑張っている。

　前回、英語で意志の疎通をはかるためには、それほど多くの語彙は必要としないということについて述べた。せいぜい千数百語知っていれば、日常のコミュニケーションのためには十分である(はずだ)。つまり、中学校で習う英語の単語だけで事足りるのだ。一方、英字新聞の論説記事や英文で書かれた小説などを読み、TED talk のような講演を聴くためには、やはり、10,000 語程度は知っていなければならないと思われる(*1)。

(*1)第１回に述べたとおり、筆者はほとんど英語の受け答えができない状態で米国の大学に留学した。とはいえ、物理学の教科書に書かれている専門用語はほとんど知っていたので、講義やセミナーで話されていることはおおむね理解できた。ただ、時々ジョークが交わされるときに理解できず、とまどうことが多かった

　そこで今回は、英単語の覚え方について考えてみたい。英会話教室で以前使っていたテキスト、カズオ・イシグロ「An Artist of the Floating World (浮世の画家)」は、映画俳優 － 渡辺謙が主演して NHK ドラマにもなった。日本的情緒や心理的葛藤を老成した筆致で(著者はまだ 30 歳)しかもわかりやすい英文で表現していることに驚かされた。比較的わかりやすいとは言え、

やはり知っている語彙数が 10,000 語なければ、余裕をもって読みこなせないのではないかと思われる。この中に mediocre と insinuation という単語が何度かでてきた。出てくるたびに筆者は辞書を引いて意味をしらべた。3度辞書をひいてやっと覚えた。それぞれ「二流の、良くも悪くもない」および「ほのめかすこと」という意味をもつ**ラテン語起源**の単語で、フランス語の単語でもある。このような単語の意味は文章の前後の意味から類推することができる。ミッション系の高校の生徒に聞いたのであるが、英語教師をしているシスターたちは、はじめて見る単語でもすぐに辞書をひかずに意味を考え、類推しながらどんどん読むように教育するそうだ。前回紹介した米原万理氏(*2)も同じことを言っている。後に辞書でしらべて、単語の意味が類推したとおりであったときの喜びがおおきく、こうして覚えた単語はけっしてわすれないのだそうだ。

(*2)米原万理「米原万理の『愛の法則』」(集英社新書)

2.　11 世紀初頭、イングランドは混乱の極みにあった。1016 年、一度は北方ノールウエイのクヌート王に国土を征服されたものの、エドワード懺悔王によって英国王統は回復された。かれの死から半世紀後フランスのノルマン公国の貴族ノルマン公ウイリアムが 6,000 の兵を率いて英国に侵攻した。1066 年、かれはヘイスティングスの戦いに勝利し、ウイリアム 1 世として即位した。これをノルマン・コンクエスト(the Norman conquest)という(*3)。

以来、英国には大量のフランス語が流入し、それらが時を経て英語として定着したため、英語にはフランス語と共通の語彙が多い。ラテン語からの借入も多く、フランス語はラテン語のひとつの方言であるから、英語の語彙のうち 60%弱がラテン語系の外来語で占められているらしい。このほかにギリシャ語起源の語彙が約 6%あると見積もられ、クヌート王時代の古ノルド語も残っている。本来のアングロサクソン語の単語は約 20%に過ぎないとのことである。

この 20%に属する英単語の一部を列挙してみると次のように

live, sleep, swim, walk, run, rise, go, come, do, make, keep, work, have, help, ask, look, watch, hear, listen, say, think, feel, room

いずれも日常生活に密着した基本的で、しかも英語の中核を成す重要単語ばかりである。このほか holy(神聖な),heaven(天、天国)なども古英語らしいが、sky は北のデーン人がもたらした古ノルド語、take や get など重要単語も古ノルド語の単語であるという。

ちなみに英語の聖書(*4)をいくつか調べてみると大空は firmament(アーチ形の構造物), vault(アーチ形の天井), expanse(広がり)などとなっていて、いずれもラテン語由来の言葉である。sky はもともと「雲」を意味する単語であったという。

一方、政治や法律用語はほとんどすべて外来語なのだ。支配層がフランス語を喋るノルマン人であったことから当然である。すこし列挙してみると

parliament(議会), congress(会議), council(評議), committee(委員会), convention(代表者会議), ministry(内閣), election(選挙),office(事務所)

これらはすべてラテン語由来の単語である。また「治める、統治する」とい

う意味の govern はギリシャ語起源であるが、それに接尾辞 ment がついて government(政治、行政)という英単語になったという。pig, cow, sheep, deer などは古英語なのだが、これらが調理されてノルマン人の食卓にのぼれば、それぞれ、ラテン語由来の pork, beef, mutton, venison となるのだ。

こうして英単語をその語源にさかのぼって調べながら覚えてゆけば、時間はかかるがそれに付随した多くの知識を得ることにもなる。

(*3)ノルマン人はもともとゲルマン系の民族(バイキング？) であったが、その一部が北フランス地方に侵攻、ノルマンディーに居すわって現地に同化、数世代を経てフランス語を喋るようになったとのことである。

(*4)Holy Bible(New King James Version)の創世記第1章には次のようなくだりがある： Then God said, ”Let there be a firmament in the midst of the waters, and let it divide the waters from waters.”(神は言われた「水の中に大空あれ。水と水を分けよ」) 水という言葉がなぜ複数形でてくるのか？水をアーチ形の構造物によって、上の水と下の水に分けるのだ。奇妙なことを考え出すものだが、ここに創世記作者の深慮遠謀？がひそんでいる！神は誰にこの建設を命じたのであろうか。アーチの構造に欠陥があったものか、間もなくアーチに穴があき、上の水は大洪水となって流れ出す。人間はノアとその家族だけを残してすべて溺死するのだ。神は以後、根性の悪い人間でも絶滅させることはしないと約束されるのだ。上の水おけがカラになったからではないと信じたいが・・・。やがて現れる虹も構造物に沿ってアーチを描いているではないか。

3. 上記ラテン語由来の単語 congress は gress(歩く)に接頭辞 con(共に)がついてひとつの単語になった。council は cil(呼ぶ)に接頭辞 coun(共に)がついたものであるという。英語の単語（外来語）にこのような構造があることを知ればさらに興味が深まる。

同じようにして、民主主義を意味するギリシャ語由来の言葉 democracy は dem(民衆、人々)と cracy(統治)の合成語なのだという。すると合成語を憶えるよりもそれを分解した語の要素を知っていればいろいろ応用がきくのではないかと思われる。たとえば「(病気の)世界的な流行の」を意味するギリシャ語由来の語 pandemic は、接頭辞 pan(汎、すべての)、語根 dem(人々)、形容詞にする接尾辞 ic からの合成語であることを知れば、同系統の語 epidemic(伝染する、流行している),endemic(地方特有の)なども epi(間に、近くに、後に), en(～の中に、～に与える)などの接頭辞が語根 dem についているとして合成語の意味を類推することができる。

このような知識をつければ単語の理解も深まるにちがいない。物事の理解が深まれば、それだけ記憶にも長く留まるというわけだ。行きがかり上、少しばかり例をあげておこう：

structure(構造) = struct(積み上げる、組み立てる)+ ure(～こと、接尾辞)
construction(建設)=con(一緒に)+struct(積み上げる)+ion(接尾辞)
destruction(破壊) = de(否定の接頭辞)+ struction
instruction(教えること、心の中に築くこと)= in(中に)+ struction
obstruction(障害、妨害すること)= ob(邪魔になって)+ struction

最近、英語の語源についての参考書がいくつかでている、たとえば
清水健二、すずきひろし、本間昭文「英単語の語源図鑑」(かんき出版)

4. 英単語の覚え方については、昔からいろいろな方法が教えられている。単語帳をつくる、英単語カードをつくって、せっせと覚える。しかしながら、記憶について特別な才能を持たない(筆者のような)凡人は、覚えたそばからどんどん忘れていく。まるでシジフォス(シーシュポスとも)の神話を地で行くような不条理に直面するのだ。

どの言語についても同じだが、基本的に重要な単語は長い時間をかけて使われ続けるので、本来の意味に加えて多くの意味が付け加わるのだ。たとえば fool という単語は「頭の中がカラッポ」つまり「バカ」を意味するラテン語由来の単語であるが、次のアブラハム・リンカーンの言葉:

You can fool all the people some of the time, and some of the people all the time, but you cannot fool all the people all the time.
(すべての人をいっとき、一部のひとをつねに、騙すことはできるが、すべてのひとをつねに騙すことはできない。[柴田裕之訳])

においては、fool が「ひとを騙す」意味として使われている。

そこで強調したいことは、**(fool = 騙す)**というように機械的に覚えようとはせず、この文章をまるごと覚えるのだ(*5)。こうすると、単語の使われ方も知ることができる、リンカーンの言葉も記憶に残る。新しい単語がでてきたら、それが入っている文章をまるごと覚える。時間がかかるようでもこの方法が最も合理的であると思われる(*6)。

(*5)聞くところによれば、run は「走る」だけではなくなんと約 180 通りの意味があるそうである。180 通りの run をふくむ文章を憶えるよりも、こういう場面で run が使えるという感覚を身につけることが重要であろうと思われる。

(*6)毎回英語の監修をお願いしている U 先生は、小学生の時に「般若心経」を自然に覚えてしまったそうだ。はじめ何のことかわからない呪文にすぎなかった経文が、年を経てその意味がわかるようになり、たいへん役に立ったそうである。江戸時代には「論語」の素読という良い習慣があったようだが、いまや完全に廃ってしまった。フランスでは、ラシーヌの素読が現在も小学校で続けられていると聞く。

単語は時に他の単語とむすびついて、熟語や成句をつくる。重要単語であればあるほど、活発に他の単語を取り込んで新しい意味を創り出す。あたかも脳内ニューロン(脳内神経細胞)が他のニューロンに盛んに触手をのばして強いネットワークを形成することに似ている。 たとえば、by, and, large などはそれぞれ基本的に重要な単語であるが、これらを結合して by and Large とすれば「全般的に、概して、すべて考慮して」という意味の熟語になって:

By and large, the company has been pretty good to me.
(概して、会社は私にとってたいへん良かった)

のように使われる。帆船時代、むかい風を by the wind, 追い風を sailing large と言ったことがもととなっているらしい(*7)。これからもわかるとおり、単語の意味を別々に覚えていてもほとんど役にたたない。

(*7)日向清人「英語はもっとイディオムで話そう」(語研) large についてはほかにも A huge crocodile is at large in this area.(大ワニがこの地方に逃げ込んでいる)のような言い方も紹介されている。At large = 「一般に、全体に」のほかに「逃亡中」という意味がある。

以上からわかるように、単語をそれぞれ独立に大量に覚えてもほとんど役にたたない。新しい単語に出会ったときに、その意味と同時に、文章のなかの位置とか、どのように使われているか、他の単語とのむすびつきなどをジックリと吟味することが大切である。時間がかかり、効率が悪そうであるが、長い目でみれば、このカメの歩みこそ一番有効であったことがわかると思う。

****

中国人から見た日本人の言語表現心理（１３）　　俞彭年

相手に和する五つの心

私の行きつけの理髪店の壁に「五つの心」と書いた木片がかけてある。五つの心とは次のことだ。
素直の心、「はい」と言います。
反省の心、「すみません」と言います。
謙虚の心、「おかげさまです」と言います。
奉仕の心、「させていただきます」と言います。
感謝の心、「ありがとうございます」と言います。
散髪してもらいながら、わたしはいつもこの五つの心を考える。顧客に対する店のアピールと言ってしまえばそれまでだが、私には日本人の人と付き合う時の心構えが良く示されていると思えてしょうがない。だが、最近日本人自身が日本人は変わってきていると言うが。
五つの心で思い出すのは中国がかつて張ったキャンペーン「五講四美」だ。「五講四美」とは次のことだ。
文明・礼儀・衛生・秩序・道徳の五つに気を遣い、心・言葉・行為・環境の四つを美しくする。
これはまったく中国の国情に合わせたキャンペーンであり、十年も続いた文化大革命で乱れきったモラルの建て直しだった。私はよく心を美しくする項目の説明に理髪店の壁にかけてあった「五つの心」を当てればとてもわかりやすくなると思った。そして中国人はきっと受け入れると確信した。

五つの心に共通するものは相手に和することではないだろうか。和するからこそ素直になり、「はい」が自然と口から出てくる。自分の非や足りなさ、人々への迷惑や世話になったことなどを認めて相手に申し訳ない気持ちを示すのも和することの表れであり、「すみません」がその反省の心を伝える。
おごり高ぶらず、何事も人から受けた助けの結果だと思えば有り難く思う心が備わり、人は謙虚になり、「おかげさまです」と相手に示して和する。相手がいるから奉仕ができると思う心も正に相手に和する心からでてきたのであり、「させていただきます」がそのような心の仕組みをぴったりと表して

いる。相手に和する印として「ありがとうございます」と礼を言って感謝の気持ちを伝える。相手に和する心がなければ、当然感謝の気持ちも生まれず、「ありがとうございます」も口にしない。五つの心は和の精神の異なった場合における具現なのだ。
　言葉は心の表れだ。従って、日本人の言語表現心理を知るには和の精神、五つの心を知らなければならない。日本人の言語表現心理を研究することはつまり和の精神や五つの心などが言葉にどのように表されているのかを研究することになる。

　中国の伝統文化にも和の思想があり、中華民族の普遍的価値観の一つになっている。この和の思想は人との付き合いでは「和睦相処」を強調する。
人とは仲良くつきあう。友好的につきあうということだが、ではどのようにすれば仲良く付き合え、友好的に付き合えるのか。この問いにわたしはいつも日本人の五つの心を答えにしてはどうだろうかと考える。
　日本人にとっても和は普遍的価値観だと思われる。しかし、日本人の和の体現の仕方は中国人のそれより繊細微妙であり、中国人の足りないところはまさに繊細微妙そのものではないだろうか。日本人はその繊細微妙な心理状態を能面の如く表情に表さず、それに身振りや抑揚も貧しいが、言葉にはきめこまかくことごとく表す。日本語の表情は豊富多彩できめ細かいから、中国人が難しいと思うのだ。
　心理状態を表すうえで中国人と日本人は実に対照的であり、中国人は表情や身振りや言葉の抑揚で表し、日本人は言葉遣いで表す。

　中国語では日本語の「はい」に当たるのは「是」だが、これは承諾を示す言葉になっている。中国人が普通承諾するのは事柄が正しいから、理にかなっているからだが、ここには五つの心がいう素直さが入らない。これは中国人が論理的で、日本人は情緒的な由縁だろう。
つまり相手に和するという心理的な要素を含む「はい」は「是」にはイコールしないということを知るべきだ。ちなみに「素直」のぴったりした訳語も中国語にはない。
「すみません」はどうだろう。中国語では「対不起」と「対不住」と「劳驾」との 2 種類の訳語になる。前者は相手に迷惑などを掛けたときのわびる言葉であり、後者は相手に頼み事をするときの言葉で、骨をおらせたり世話を掛けたりするという意味だ。
日本語では謝る気持ちと労をねぎらう気持ちが相通じて、反省の心として「すみません」となり、やはり情緒的な特色を有している。中国では論理的で、わびる言葉はわびる言葉、頼み事の言葉は頼み事の言葉とはっきりわけている。
「おかげさまです」は中国語では「托福」に当たる。この言葉の使用頻度からみると、日本語の方が断然多く、中国語は少なく、それに多くは相手から安否を問われた時などの回答に使われる。例えば、「你最近身体怎么样啊？（最近、身体の調子はどうかね)」「托您的福、很好。(おかげさまで、調子がいいです)」。
日本語での使用頻度が高いのはやはり日本語の方が情緒的、つまり謙虚さを持って相手に和する気持ちが強いからだろう。中国語のほうでは決まりきっ

たあいさつ語で、「客气活（謙遜した言葉）だ」。つまり中国人は論理的に物事を割り切ってしまうからだ。自分をいろいろと配慮してくれる人や上司であれば、謙遜して「托您的福」を言うのが当たり前だと思い、自分と関係ない人であれば言う必要はなく、言っても空々しく全くのタテマエだと割り切っているにちがいない。
「させていただきます」を中国語に訳すのはなかなか難しい。ぴったりした訳がない。意味から強いて当てはめるのであれば中国語の「让我（允许我）＋動詞」の文型になると思うが、例えば「首先请让我向各位祝賀。(まず皆様にお祝いを述べさせていただきます)」のように使う。
しかし、中国語ではこのような使い方の使用範囲は日本語ほど広くない。というのは、これは僭越ながら自分が…することを許してほしいという言い方だからだ。確かに論理的に見てこのような場合はそんなに多くないはずだ。
　日本語では謙譲の言い方とされ、奉仕の気持ちを伝えることによってよく使われる。だから訳すときがたいへんだ。多くの場合は訳せないだろう。例えば、「考えさせていただきます」は「让我想想」でよいだろうが、「お電話させていただきます」は「请允许我給您打电话」となるが、ややぎこちなく感じないだろうか。普通の言い方「我给您打电话」にすると、「させていただきます」の意味が伝わらず、「お電話いたします」と同じになってしまう。訳者を泣かせる言い方であり、中国人と日本人の言語表現心理の違いがはっきりしている。
　感謝の心を表す「ありがとうございます」は中国語の「謝謝」に当たる。これは中国人も日本人も同じ発想で使われているが、実際の使用頻度は日本語の方が高いように思われる。特に日本での買い物などでは中国人の耳には「ありがとうございます」がしきりに聞こえる。

　日本人は愛想が良いという印象を深くする。逆に現在の中国では愛想は以前よりはよくなったが、日本ほど「謝謝」が聞かれない。
****

本居宣長について（上）　　赤羽清志

本居宣長（享保 15（1730）～享和 1（1801））、

　伊勢松坂の木綿問屋小津家の生まれ。京都で医学を学び、また、契沖の書に接して国学への目を開いた。宝暦３年（175３）帰郷して医業のかたわら『源氏物語』『伊勢物語』などを講じていたが、宝暦 13 年(1763) 松阪に来た賀茂真淵に『古事記』研究を勧められ、真淵の門人となった。名著『古事記伝』は宣長が 30 余年にわたって心血を注いだ畢生の事業である。また、『源氏物語玉の小櫛（おぐし)』などを通じて日本文学の本質が「もののあはれ」にあることを述べ、これらの研究によって国学の基礎を確立した。

国学

　　『古事記』、『日本書紀』、『萬葉集』などの古典の文献学的研究に基づいて、儒教、仏教渡来以前における日本固有の文化および精神を明らかにしようとする学問。近世、学術の発達と国家意識の勃興に伴って起こり、

荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤（国学の四大人（しうし））とその門流によって確立された。古学、皇学、くにつまなびとも呼ばれる。儒仏を排斥、中世の和学を克服した。文献学 Philologie　としたのは東京帝国大学教授芳賀矢一（1867～1927）。

宣長の古道学

寛政 10 年（1798）、30 有余年をかけて『古事記伝』を完成した宣長は、初心者向けの入門書『うひ山ぶみ』を執筆し、「物まなび」＝「国学」と言う学問についてその範囲を明確に設定し道、神学、有職学、古書学、歌学の四つに分類した。

神学

古代日本の「道」の学問＝古道学。この道は、惟神（かんながら）の道であって『古事記』、『日本書紀』に記されている天照大御神の道で、天皇の天下をしろしめす道、四海万国にゆきわたるまことの道で日本にだけ伝わっている。正しく道を学ぶことにより、「大和魂」を固め、「漢意」（からごころ）に陥らぬ衛（まもり）となる。
「大和魂」は、古代日本人の持つ美徳でありまっすぐで清らかな心を意味する。初出は『源氏物語』の光源氏の台詞で、知恵、気働き、思慮分別などを意味すると考えられる。「道」については、『直毘霊』（なおびのみたま）（後出）において、『古事記』に登場する「直毘神」（なおびのかみ）の霊言を中心に解説している。
「大和魂」の対概念は、「漢意」（からごころ）である。学問をして「道」を知ろうとするならば、まず漢意をきれいさっぱりと取り去らなければならない。この漢意がきれいに除き去られないうちは、どんなに古書を読んでも、考えても、古代の精神は理解しがたく、「道」というものの理解はできない。

有職（ゆうそく）学

官職、儀式、律令やもろもろの故実、装束、調度などのことを学ぶ。

古書学

上は六国史その外の古書をはじめ、後世の書に至るまでいろいろな筋の書を学ぶ。

歌学

歌の学びには、歌だけを詠むの＝詠歌専門と、詠歌に加えて古い歌集や物語の書などを解釈する＝文学研究も行うという二通りある。宣長において、和歌は、研究の対象である前に創作するための器であった。

宣長は、『萬葉集』は、「道の学び」だけでなく、「歌の学び」にもよいと考えた。しかも、それは研究の対象というだけでなく詠歌の規範とも考えた。また、宣長は、後世風歌（『古今集』、『新古今集』など）を詠み、後世歌を研究した。

学問のスタート

11歳で父を亡くした宣長は、23歳に医師になることを目指し京都に留学した(5年半)。漢学を学ぶため、儒学者の堀景山（1688~1757）に入門した。景山は日本古典文学に精通しており、とりわけ契沖を尊敬していた。宣長は契沖の『百人一首改観抄』を読む機会を得て、次々と契沖の著作を手に入れて古典学に開眼した。契沖の説はそれまでの諸説とは異なり、証拠を重視する文献実証主義であった。『萬葉集』を証拠立てて研究するには、それより古い書物やそれに準ずる書物（『古事記』、『日本書紀』、『続日本紀』、『古語拾遺』『懐風藻』など）を根拠資料として用いなければならない。

宣長は、契沖から文献学の方法と文学作品の真意を学び文学を研究する上での基盤とした。

当時、文献よりも権威があるとされた「古今伝授」は、最も優れた弟子一人に口伝で秘説として伝授された。宣長は、定家や兼好の時代には伝授は存在せず、人から伝授されなければわからない歌ならばそのような歌は不要であると考えた。

松阪で17、8歳の頃から全くの独学で歌を詠むことを宣長は、京都に来て、宝暦2年(1752)冷泉派の森河章尹（あきただ）に入門した。暫くして思い描いた志と異なることがわかり、宝暦6年（1756）有賀長川（1717-1778）に入門、二条派歌学を習得、将来の飛翔の基盤ができた。

人生の転機

『萬葉集』の枕詞の研究書である賀茂真淵の『冠辞考』を読み古学の極意に触れ衝撃を受けた34歳の宣長は、真淵に直接会って教えを受けたいと熱望していたが、本屋柏原兵助のはからいで、面会が実現した。このくだりは「松坂の一夜」として戦前の文部省著作教科書『尋常小学国語読本巻11』に載った。

松坂の一夜

本居宣長は伊勢の国松阪の人である。若い頃から読書がすきで、将来学門を以て身を立てたいと、一心に勉強してゐた。

或夏の半ば、宣長はかねてか買ひつけの古本屋に行くと、主人は愛そうよく迎えて、

「どうも残念なことでした。あなたがよく会ひたいと御話になる江戸の賀茂真淵先生が、先程御見えになりました。」

「先生がどうしてこちらへ。」

「何でも山城・大和方面の御旅行がすんで、これから参宮をなさるのださうです。あの新上屋（しんじやうや）に御泊りになって、さつき御出かけの途中『何か珍しい本はないか。』と、
御立ちより下さいました。」

「それは惜しいことをした。どうかして御目にかゝりたいものだが。」

「後を追って御いでになつたら、大てい追ひつけませう。」

宣長は、大急ぎで真淵の様子を聞きとつて、後を追つたが、松阪の町はづれまで行つても、それらしい人は見えない。次の宿のさきまで行つてみたが、やはり追ひつけなかつた。宣長は力を落して、すごすごともどつて来

た。さうして新上屋の主人に、万一御帰りに又泊まられることがあつたら、すぐ知らせてもらひたいと頼んでおいた。
　望がかなつて、宣長が真淵を新上屋の一室に訪ふことが出来たのは、それから数日の後であつた。二人はほの暗い行燈（あんどん）のもとで対座した、真淵はもう七十歳に近く、いろいろりつぱな著書もあつて、天下に聞えた老大家。宣長はまだ三十歳余り、温和なひとゝなりのうちに、どことなく才気のひらめいてゐる篤（とく）学の壮年。年こそちがへ、ふたりは同じ学問の道をたどってゐたのである。だんだん話してゐるうちに、真淵は宣長の学識の尋常でないことをさとつて、非常にたのもしく思つた。話が古事記のことに及ぶと、宣長は「私はかねがね古事記の研究をしたいと思つてをります。それについて何か御注意くださることはございますまいか。」
「それはよいところに気がつきました。私も実は我が国の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記研究をしようとしたが、どうも古い言葉がよくわからないと十分なことは出来ない。古い言葉を調べるのに一番よいのは万葉集です。そこで先ず順序として万葉集の研究を始めたところが、何時の間にか年をとつてしまつて、古事記に手を延ばすことが出来なくなりました。あなたはまだお若いから、しつかり努力なさつたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。たゞ注意しなければならないのは、順序正しく進むといふことです。これは学問の研究に特に必要ですから、先づ土台を作つて、それから一歩一歩高く登り、最後の目的に達するやうになさい」
　夏の夜は更けやすい。家々の戸はもう皆とざされてゐる。老学者の言に深く感激した宣長は、未来の希望に胸ををどらせながら、ひつそりした町すぢをわが家へ向つた。
　其の後宣長は絶えず文通して真淵の教を受け、師弟の関係は日一日と親密の度を加へたが、面会の機会は松阪の一夜以後とうとうこなかつた。
　宣長は真淵の志をうけつぎ、三十五年の間努力に努力を続けて、遂に古事記の研究を大成した。有名な古事記伝といふ大著述は此の研究の結果で、我が国文学の上に不滅の光を放つてゐる。

　従来『日本書紀』の講書・注釈はかなり行われてきたが、『古事記』は古代日本を知る資料としてほとんど重んじられなかった。しかし儒仏の受容以前の日本を知るために古言のままに記した「神典（かみのみふみ）」『古事記』を漢意（からごころ）を排して正しく解読することによって古事（ふること）と古意を知るべきとの考えから、宣長は古事記研究に後半生を投じた。明和（1767）『古事記伝』の執筆をはじめ寛政１０年（1798）完成した。

『古事記』神代一之巻（『古事記伝』三之巻）冒頭の読み

「天地初発之時」　アメツチノハジメノトキ

　それまではアメツチノハジメテヒラクルノトキなどと読まれていた。当初、宣長は天地をアメクニと訓むのが正しいのではないかと思っていたが、真淵の指導（『久爾都知考』）によって、天＝広い、地＝天と等しく広い（クニは狭く、ツチは広い）ことからアメツチと読むことに改めた。

初発について「ハジメテヒラクルと訓むのはひがごとなり」、漢籍言（カラブミゴト）であって日本の古語ではない。『萬葉集』、『古事記』に用例があることからハジメと訓むと結論づけた。

真淵の詠歌指導

宣長は、真淵に会うまでは詠歌の手本としては三大集（『古今集』、『後撰集』、『拾遺集』）を真似て詠むのが良いと思っていた。真淵は、歌学と詠歌は表裏一体であって、古学を修めるには古歌（万葉風）を詠まなければならないと指導した。

春庭誕生

宝暦 13 年（1763）長男健蔵が誕生した。後に春庭と改名、後鈴屋（のちのすずのや）と称した。

「物のあはれを知る」説の提唱

『紫文要領』（しぶんようりょう）　宝暦 13 年（1763）　『源氏物語』の評論ものがたりは、儒教（勧善懲悪）、仏教（因果応報）の戒めにあると言う考えかたが一般的であったが、宣長は、これに真っ向から批判した。

『源氏物語』は、「物あはれを知る」と言う一語に尽きる。人の娘に思いを寄せて命が尽きてしまうほど真剣に恋い慕う。女が男の思いを哀れと思う。

人がとてもつらいことに遭遇してひどく悲しむのを見聞きしてさぞ悲しいことであろうと推量し、他人の感情と同化する（共感）。

世の中にあるすべての事柄が五感で感じ取られ、心に刻みつかれ、あらゆるものごとの本質を体得することである。「わきまへを知る」（認知、認識といった知性）ことの後に「感ずる」（情緒や情動といった感動）ことが発生するというメカニズムが重要。

『石上私淑言』（いそのかみささめごと）　宝暦 13 年（1763）

「歌は物のあはれを知るより出で来るものなり。」　事に触れてうれしく思う、悲しく思う　その意味をわきまえ知り、その情意の本質を知ることが物のあはれを知ることである。

宣長の処女出版『草庵集玉箒』（そうあんしゅうたまははき）で、中世歌人頓阿（とんあ）の歌を絶賛、終生詠歌の手本とした。真淵は頓阿を評価していないので宣長を強く叱責した。

（つづく）

参考

中公新書『本居宣長　文学と思想の巨人』田中康二著（2014.7）
岩波新書『本居宣長』子安宣邦著（1992.5）
岩波文庫『古事記伝』本居宣長撰　倉野憲治校訂（1940.8
『本居宣長』熊野純彦著　作品社（2018.9）
『本居宣長』村岡典嗣著　岩波書店（1928.5）　原著　警醒社（1911.2）
『本居宣長』小林秀雄著　新潮社(1977.10)　新潮文庫上下（1992.5）

日本の思想 15『本居宣長集』吉川幸次郎編集　筑摩書房(1969.3)
講談社選書メチエ『本居宣長『古事記伝』を読む』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ　神野志隆光著（2010.3）
日本思想体系『本居宣長』吉川幸次郎他編　岩波書店（1978.1）
新潮日本古典集成『本居宣長集』日野龍夫校注（1983.7）
日本の名著『本居宣長』石川淳責任編集　中央公論社（1970.5）
『『古事記』『日本書紀』の最大未解決問題を解く』　安本美典著　勉誠出版（2018.5）
和辻哲郎全集第 13 巻『日本倫理思想史下』岩波書店（1962.11）　原著 1952.12
『日本政治思想史研究』丸山真男著　東京大学出版会（1983.6）　原著 1952.12
『本居宣長全集』9 巻~12 巻　大野晋編　筑摩書房(1974.3)
ちくま新書『日本思想全史』清水正之著（2014.11）
岩波新書『日本思想史』末木文美士著（2020.1）
『國體の本義』文部省（1937.3）

****

さらに昔から「いい人」の国だった（１）　　臺　一郎

これほど天賦の才能を持つ国民はない

1854 年、徳川幕府は 200 年以上に及ぶ鎖国政策を廃止した。開国に踏み切った我が国には、欧米から大勢の外交官や学者やジャーナリストや冒険家たちが訪れたことは既に述べたとおりである。彼らは、はるか極東の果ての中国大陸から更に海を隔てたその先にある島嶼国家において、西欧社会の文化や習慣とは明らかに異なる、それどころかしばしば真逆でさえありながら、優れて洗練され、成熟した別種の文明が花開いていることを知り、驚き、そして感心したのである。

実は同じような感嘆や驚きは、幕末から更に 300 年近くさかのぼる 16 世紀の中頃の織田信長や豊臣秀吉が活躍した安土桃山の時代に、キリスト教布教のために我が国を訪れたフランシスコ・ザビエル、ルイス・フロイス、グネツキ・オルガンチノ、アレッサンドロ・ヴァリヤーニなどのスペイン人やポルトガル人宣教師たちの滞在記の中にも記述されているのである。

また、鎖国下の江戸時代にあって、長崎出島に限って滞在と貿易を許されていたオランダ国の商館付き医官であったエンゲルト・ケンペルやカール・ツエンベリなども、滞在中に経験した江戸幕府への参府随行記などの中で、当時の日本社会や日本人の国民性などについて様々な切り口からその印象や驚きを紹介している。

さて、1549 年に日本を訪れ、我が国の歴史上で初めてキリスト教の布教を行ったのは、スペインのキリスト教司教であり、宣教師であり、イエズス会創設メンバーの一人でもあったフランシスコ・ザビエルである。彼は 1549 年イエズス会のインド管区長の職にあった時に日本を訪れた。

ザビエルは日本での滞在中に多くの手紙をスペインやインド宛てに書いた。その中で日本人の包括的な印象を「この国の人々は今までに発見された国民の中で最高であり、日本人より優れている人々は、異教徒の間では見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほどの名誉心の強い人々で、他の何よりも名誉を重んじます。大部分の人々は貧しいのですが、武士もそうでない人々も、貧しいことを不名誉だとは思っていません」と紹介している。

また「大部分の人は読み書きが出来ますので、祈りや教理を短時間に学ぶ際にたいそう役立ちます」と感心し、更に「日本人は好奇心が強く、うるさく質問し、知識欲が旺盛で、質問は限りがありません。また彼らの質問に私たちが答えたことを彼らは互いに質問しあったり、話したりしあって尽きることがありません。日本の人々は慎み深く、また才能があり、知識欲が旺盛で、道理に従い、またその他さまざまな優れた資質がありますから、彼らの中で大きな成果を挙げられないことは“絶対”にありません」と褒めちぎっている。

ザビエルに続いて 1563 年と 1577 年の二回にわたりキリスト教の布教のために日本を訪れ、膨大な日本研究の資料を残したポルトガル人宣教師のルイス・フロイスは、日本人について「彼らの習慣は、我々の習慣と極めてかけ離れ、異様で、縁遠いもので、このような文化の開けた、創造力に旺盛な、天賦の知性を備える日欧の人々の間に、こんな極端な対照があるとは信じられないくらいである」と驚いている。

彼は著書「ヨーロッパ文化と日本文化」の中で、日欧の文化や習慣の違いの例として、「西欧人は服の表地に良質な布を使うが日本人はしばしば裏地に良質な布を使う」とか、「日本人は家の入口で靴を脱ぐが、西欧人は脱がない」とか、「日本人は文字を右肩から縦に書くが、西欧人は左から横に書く」とか、「日本人は食事に箸を使うが、西欧人は手掴みで食べる（当時の西欧にはまだフォークで食べる習慣はなく、手掴みであった)」など、全部で 595 項目にも及ぶ日欧の比較を行っている。

1570 年に来日し、持ち前の明るさと魅力的な人柄で日本人に大変人気があったとされるイタリア人のイエズス会宣教師グネツキ・オルガンチノは、1577 年にゴアのベルナルディーノ・フェラーノに宛てた手紙の中で「この国民は野蛮でないことはご記憶ください。なぜなら信仰のことは別として、私たちは互いに賢明に見えるが、彼等（日本人）と比較すると甚だ野蛮であると思う。私は、真実、毎日、日本人から教えられることを白状する。私には、全世界で、これほど天賦の才能を持つ国民はないと思われる」と述べている。

1579 年位にやはりイエズス会宣教師として我が国を訪れたアレッサンドロ・ヴァリニャーニは、日本における布教心得を記した冊子の中で、日本人の長所として「有能で優れた理解力を示す民であること」、「粗暴者や無能者がいないこと」、「全世界で最も面目や名誉を重んじる民族であること」、「忍耐強く人間としてあらゆる苦しみや不自由を耐え忍ぶこと」、「慎み深く感情を表さないこと」、「すべての生活が清潔で調和がとれていること」などの点を挙げている。

****

北島勇さんと海外茶・ハーブテイー（３）

「心と身体にいいものを」＜日本緑茶センター（株）創立５０周年記念誌より＞

「フラワーテイー」から「ハーブテイー」へ

創業１０周年にあたる１９７９年に日本橋高島屋から当社商品を中心とした「ハーブフェアー」開催のご依頼がありました。フェアーには、ストローベリーファームの「ハイビスカスのシャーベット]、三笠園芸の「ハーブの種]、香辛野菜として野菜市場に出始めたばかりのサンファームの生ハーブも出店、ハーブは以後、ドライハーブのほかに生鮮品としての販路もひろげていくことになりました。このフェアーは当初は１週間の開催予定でしたが、反響が大きかったため延長されました。
このフェアーが契機となって、マスメデイアはようやくフラワーテイとして紹介していたハーブを「ハーブテイー」の名を冠して載せ始めました。
そしてこの年、完成当時はアジアで最も高い超高層ビルだった池袋サンシャインシティ文化会館ビルに在日ドイツ商工会議所ショールームがオープンし、ポンパドール・ハーブテイーのコーナーを作ってもらい、まさに本格的なハーブの時代が始まりました。

ハーブの量り売りの店「テイー・ブテイック」誕生

１９８１年６月に事業拡大のために本社を渋谷区渋谷に移転、翌１９８２年１１月、世界中の美味しいお茶とハーブで健やかで美しい生活を送ってほしいとの願いを込め日本初のハーブ＆テイーの専門店「テイーブテイック青山」を港区青山に開店しました。テイーブテイックは、当時珍しかったハーブテイーを少量の１０ｇから量り売りで気軽にお試しできる店として。若い女性を中心に話題となりました。ショップを情報発信スポットとすることで、ようやくハーブを「フラワーテイー」ではなく「ハーブテイー」として多くの方々に理解していただける時代がやってきました。その後、テイーブテイックのスタイルをコピーしたハーブショップが全国に次々と登場することになりました。

カモミールの受難

しかしこの１９８２年、日本のハーブは大きな試練に直面しました。それまで当社が１３年間、食品として輸入してきたカモミールが、突然、厚生省より医薬品に分類され、ハーブテイーとして輸入できなくなりました。カモミールファンの方から残念がる声が上がり、当社は厚生省に食品の部類に分類されるよう申請を続けました。翌年、欧米では飲料など食品使用されていることが考慮されカモミールを医薬品の分類から食品の分類にうつすことが厚生省から発表されました。
ポンパドールのカモミールテイーは、１年ぶりに輸入が再開することとなり、日本中のお得意、ファン方々から再び楽しめると感謝されました。

日本ハーブ協会連絡協議会創立

ハーブの時代到来とともに、ハーブ市場の今後の健全なる成長を志す取扱業者を募り、１９８４年に「日本ハーブ協会連絡協議会」を創立しました。日本ハーブ協会連絡協議会は、会員相互の知識・資質向上、各種情報交換を目指し、ハーブ研究の第一人者を講師として招いた「公開勉強会」や協議会後援のイベント「ハーブショー」(池袋サンシャインシティ文化会館）などが開催され好評を博しました。会員はもとより会員以外の一般消費者に対しても、ハーブの啓蒙普及と発展に力を注いだことで内外の高い評価を得て、関係官庁にも信頼された団体として活躍するようになった。

日本のハーブの先駆者　野中草平先生

１９８５年４月に大阪出張所を大阪市淀川区に開設、西日本への新たな拠点を作りました。
この年は、日本のハーブにとって第二の大きな試練の年でした。ハーブに関する講演会や講習会でポンパドールのペパーミントを世界一のハーブティーとして紹介してくださった日本のハーブの先駆者、野中草平先生が逝去され、日本のハーブ会は、大きな星を失いました。
野中草平先生のハーブに関する知識は日本で右に出るものはなく、ハーブに深い愛情を持っていた方でした。当時活躍中のハーブ研究家たちは、先生の教えを受けた方が多く、先生を失ったことは、日本のハーブ会にとって大きな痛手となりました。
またこの年、市場では日本リーバ（現ユニリーバ・ジャパン）が北欧のハーブシャンプー「テイモテ」を発売し、トイレタリー業界でのハーブブームに拍車をかけました。

****

文化講座・講演会

****

新三木会

第１１５回:３月１９日（木）休講　　５月２１日（木）に延期

今後の予定

（ただし状況が収まり、安全が期待できる前提)。

第１１６回　４月 16 日（木）開講予定

演題：『袋小路に入った日韓関係―出口はあるか』

講師：小此木政夫・慶応義塾大学名誉教授

申込：Ｅメール・shinsanmokukai@gmail.com　電話・070-6994-0137

フルネーム・卒年・所属　（紹介者）

（紹介者）天地シニアネットワークで可

会費（受付にて）２千円，　婦人千円、学生無料，

第１１５回　５月２１日（木）（３月休講、延期分）

演題：これからの日本の政治を考える
講師：芹川洋一・日本経済新聞論説フェロー
6 月以降につきましては状況を見極めつつ、講師との調整をはかりながら決定します。
ホームページ　http://jfn.josuikai.net/ircle/shinsanmokukai/
****

奈良・興福寺文化講座

令和２年３月１２日の講座は、中止しました。４月～８月の講座も中止し、次回（第２６６回）は、９月１７日を予定。

令和２年９月１７日（木）

午後５時半～６時半：第一講
「興福寺中金堂四天王像の当初の所在に関する考察」
東京国立博物館学芸企画部企画課長　浅見龍介
午後６時４０分～７時　・・・・・心を静める
午後７時～８時：第二講
連続講話・「維摩経入門」　興福寺貫首　森谷英俊
会場：（学）文化学園 文化服装学院内
受講料：５００円　先着２００名
（ＪＲ新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から８分、都営新宿線新宿駅３分）
****

事　務　局

****
＜投稿＞を歓迎します。
＜プリント版･郵送＞
メール版を編集してプリント版を月に１回発行し郵送しています。
お申込み頂ければお送りします。一応、実費として月＠３５０円（４２００円/年）をいただいておりますが、強制するものではありません。

＜振込先＞三井住友銀行「神田支店」　（普通）７８７１５３２
（口座名）テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・５０５号

発行：２０２０年３月１３日

天地シニアネットワーク事務局　（津田 孚人）
〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１
ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX・０３－３８１９－７６５１